

林田物流

配車情報、ネットで共有

新管理システム構築へ

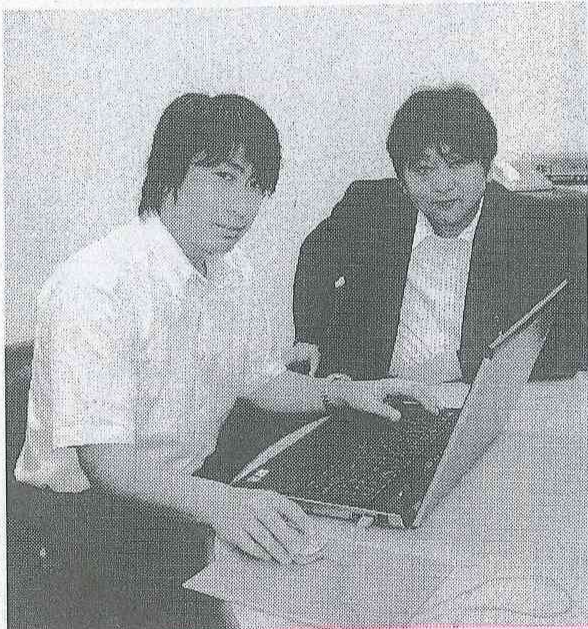
【香川】林田物流（塩田学社長、香川県坂出市）は、受注・配送業務を集約する新たな管理システムを構築するとともに、荷主や協力運送会社との間にインターネットで配車情報を共有するシステムも導入する。全ト協の「低炭素型自動車交通推進事業」の第2次公募で、「貨物自動車運送効率化実証実験」の対象に選ばれた事業で、9月からシステム開発に着手し、12月1日からの稼働を目指す。新システム導入による効率化で年間60トの二酸化炭素（CO₂）削減が可能と試算している。

配送業務は現在、電話やファクスで受注しているが、荷主の担当者ごとに受注が発生するため、林田物流では複数の担当者を配置し、運行指示や協力運送会社への委託をばらばらに行ってきた。新しいシステムはネットを活用し、受注情報を集約。方面別や重量など項目ごとに整理し、積載効率の向上を図るとともに、配車組みを改善して運行回数や距離を削減する。

業務効率化とエコ経営を両立させる事業として、8月22日に効率化実証実験の3件のうちの1件に選ばれた。荷主はこれまで4ト、10トなど車種ごとにチャーター便を依頼してきたが、出荷データを丸投げすれば集約管理システムが自動的に処理するため、発注の手間が大幅に削減される。一方で、協力運送会社への配車依頼も情報共有システムを活用する。配車結果

による運行情報（積載状況や空車情報）がリアルタイムで反映され、協力会社は求荷・求車情報をアップロードすることができ、林田物流では「香川県版のトラボックス」と表現している。システム構築にはロジ

コンビニエンス（佐野真二社長、兵庫県尼崎市）が協力。大阪のデータセンタ―を使い、セキュリティ管理も請け負う。12月のスタート時には、製造・流通など荷主5社、県外を含めた協力運送会社8社が参加する予定だ。



塩田常務（左）とロジ・コンビニエンスの佐野社長

林田物流の塩田高之常務は「当社の業務は順調に伸びているが、手作業が多い点で頭打ちになっている。デジタル化を切り口に、さらなる業績拡大を目指したい。また、輸送効率を向上させ、荷物の取り合わせを改善することで提案力を強化し、将来は全ての荷主に参加を呼び掛けていく。大手に負けない営業ツールとして活用していきたい」と話している。

また、ロジ・コンビニエンスの佐野社長は「これまで受注情報はデータ化されていないかったが、入り口をデータ化することで一貫通のシステムにしていく。ほぼ自動化を図ってアナログを極力排除し、運転日報から荷主への完了報告、請求書作成までカバーしていきたい」と話している。（江藤 和博）